博士（保健学）学位論文要旨

養護教諭が行うタッチングの基礎的研究
―養護教諭と児童生徒、相互の視点から―

Basic Research on Situation and Influence of Touch by Yogo Teachers
-Based on Both Viewpoints of Yogo Teachers and Pupils-

2015 年

指導教員　橋本　紀子　教授

1202101
澤　村　　文　香
SAWAMURA, Fumika

女 子 栄 養 大 学

［研究背景］保健室には、様々な健康課題のある児童生徒が来室する。養護教諭は対応の際、児童生徒の身体に触れる、すなわちタッチングを行っているが、その根拠となる理論や方法論は確立されていない。タッチング理論や方法論の確立は、養護教諭の実践の根拠となり確かな対応へと繋がるとともに、児童生徒の心身の健やかな発育発達に資するために意義あるものと考える。

［研究目的］養護教諭が実践しているタッチングについて、行う側である養護教諭と受ける側である児童生徒、相互の視点から検討し、児童生徒の心身の健康の保持増進と自己肯定感を育む支援効に果的なタッチング理論や方法論の確立に向け、基礎的な知見を得ることを目的とする。

［研究方法］研究目的を達成するため、以下 3 つの作業課題を設定する。作業課題 1 は、現職女性養護教諭 340 名に対する無記名自記式質問紙調査から、養護教諭が行うタッチングの実態を明らかにし、養護教諭の職務の特質や専門性に基づいたタッチングについて検討する。作業課題 2 は、現職女性養護教諭 10 名に対する半構造化面接を行い、タッチングの認識、本人が捉えているタッチングの実際、タッチングを行う際の配慮について、養護教諭側の視点から明らかにするとともに、作業課題 1 で得られた知見の確認、捉えきれなかった事象について検討する。作業課題 3 は、公立小学校 1 校と公立高等学校 1 校の保健室においてフィールドワークを実施する。具体的には、参与観察、養護教諭へのインフォーマルインタビュー、児童生徒へのインタビューを実施し、養護教諭が実際に行っているタッチングと、タッチング後の児童生徒の反応や変化に焦点を当て、児童生徒側の視点から養護教諭が行うタッチングについて検討する。併せて、フィールドワーク中に来室した児童への聞き取り調査、生徒への無記名自記式質問紙調査を行い、タッチングを用いた対応

における心身の状態の前後比較と養護教諭の対応への評価から、養護教諭が行うタッチングの効果を探る。

［分析方法］量的調査は、単純集計により全体像を把握した。作業課題1の養護教諭が行うタッチング場面と養護教諭が実感しているタッチング効果については、探索的因子分析を行った。作業課題3の児童生徒の心身の状態は、対応のあるｔ検定を行い、来室時と退室時の変化を検討した。質的調査のうち、作業課題2の養護教諭への面接は、終了後速やかに逐語録を作成し、マトリックス抽出法を用いて内容分析を行った。作業課題3のフィールドワークで得られたデータは、速やかにフィールド・ノーツとしてまとめ、分析を同時に行った。研究対象者（養護教諭及び児童生徒）の相互のやり取りの流れを損なわないように、実際に行われたタッチング場面について、その前後を含めて120の事例を抽出した。抽出された事例を、「タッチングの合図」・「タッチングの場面」・「児童生徒の反応」の視点から分析した。タッチング場面の「分類」は、作業課題1及び2で見いだされたタッチングの種類を基に行った。

［結果及び考察］本研究の結果、養護教諭は児童生徒に対応する際、9割以上がタッチングを実施していた。養護教諭のタッチング形成には、【自己の体験】、【児童生徒からの学び】、【研修】の3つの要因が関与しているが、研修を受ける機会は少なく自己の経験知に頼っていることが明らかとなった。児童生徒は、養護教諭が行うタッチング、特に【身体的関わりタッチング】を自然なこととして受け入れていることが示唆された。養護教諭が行うタッチングの影響としては、【受容】【安心・安定】【納得・軽快】【愛着】【個としての存在・教育的承認】【自己開示】の6つの効果が推測された。これらのことから、養護教諭が行うタッチング理論と方法論の基礎として、以下の知見を得た。

1. 養護教諭が行うタッチング理論：養護教諭が行うタッチングの構造と機能を明らかにした。タッチングの種類は、【日常的コミュニケーションタッチング】、【心理的効果期待タッチング】、【身体的関わりタッチング】、【養護教諭の思いを伝えるタッチング】、【職務を円滑に進めるタッチング】の 5 種類があることが明らかとなった。これらのタッチングは、単独で行われる場面と、複合的に行われる場面があった。また、養護教諭が行うタッチングには、【観察】、【合図】、【タッチングを用いた関わり】という過程があり、【タッチングを用いた関わり】には、≪導入≫、≪関わりを深める≫という段階があることが示唆された。養護教諭のタッチングが、児童生徒の心身の健康の保持増進に寄与し、かつ性的な意味合いを含ませないためには、養護教諭自身が≪職務として行う≫という認識を持ち、≪職務の範囲で行う≫という姿勢を示すことが重要である。タッチングが児童生徒に受け入れられ、かつ効果的に作用するには、≪児童生徒の尊厳を守る≫、≪相手の状況に合わせる≫、≪性別への配慮≫、≪発達段階に合わせる≫といった配慮が前提となる。

2. 養護教諭が行うタッチング方法：養護教諭が行うタッチング方法として、その基礎となるフィジカルアセスメントを確実に習得することが重要である。タッチングは「言葉かけ」とともに行われることにより、効果が高まることが明らかとなった。「言葉かけ」は、タッチングのタイミングと意図によって異なる内容となり、使い分けることが重要である。同時に、カウンセリングの基本姿勢を意図した「言葉かけ」を行うことで、より身体への支援を通した心への支援に繋がる効果が得られる。

3. タッチング研修の充実：≪現職研修での学び≫は＜これまでの実践が理論と融合し、より意識的な実践＞に繋がる。養護教諭が行うタッチングの研修を充実させていくために、理論と方法論の確立が期待される。